

2010 年度 第 1 期
第 3 回 子宮頸がんの低年齢化について

子宮頸がん

産婦人科 三澤俊哉

2010 年 7 月 9 日発行

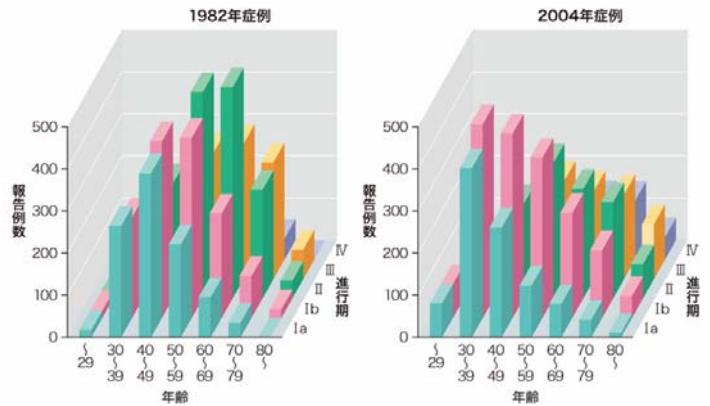
1. 子宮頸がん罹患者は低年齢化しています

一般に、がんは年齢とともに罹患率が上昇していきますが、今回のテーマである子宮頸がんは若い世代に多く、罹患者のピークが 30 歳代後半となっていることが特徴です。(図 1)

子宮頸がんに罹患する婦人は、1980 年代と比較して 10 歳位若くなっています。日本では、20-30 歳代の女性で最も多いがんとなり、そのことが多くの社会的な問題を引き起こしています。

図 1

子宮頸がん罹患者の変化



岩坂 剛: 臨婦産 61(6):780-785, 2007
日本産婦人科学会婦人科腫瘍委員会報告: 1982 年および 2004 年患者年報

2. 低年齢化の結果は深刻です

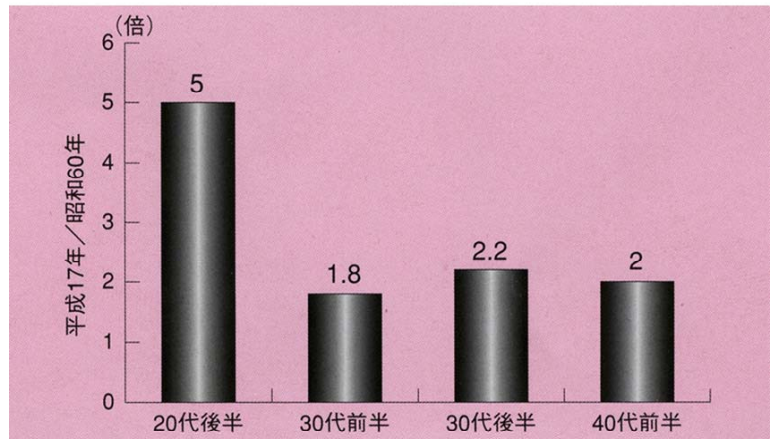
子宮頸がんによる死亡者は低年齢化し、60 歳未満では全体に増加しています。特に 20 歳後半では、5 倍となっています。30 歳前半～40 歳前半でも 2 倍前後に増えていきます(図 2)小さな子供や家族を残して亡くなる婦人が増えているのです。また、20～30 歳代で子宮頸がん罹患して子宮を全摘出する、または部分切除(初期がんにおける子宮頸部円錐切除)するといった婦人も増加しています。

その結果として子宮全摘出により妊娠が不可能となる、または子宮頸部円錐に関連したリスクが増加するといった悪影響がみられています。

がんの治療と引き替えにその後の妊娠を断念したり、がんの治療後に妊娠に関するトラブルに悩まされる婦人が増えているのです。

図 2

20年間での子宮頸がん死亡率増加



3. どうして低年齢化しているのでしょうか

子宮頸がんの主な原因は、高リスク型のヒトパピローマウイルスの持続感染であることが明らかになっています。このウイルスは性行為により感染し、約80%の婦人が一生に一度は感染するといわれています。性交経験の低年齢化が若い世代へのヒトパピローマウイルス感染につながり、結果として子宮頸がんの低年齢化をもたらしていると考えられます。

高校生女子の性交経験率が著しく増えています。1990年以後の12年間で約3-4倍に増加していることが確認されています。(図3)

また、20歳代の若い年代で、子宮頸がん検診受診率が極めて低い(20-24歳で5.6%、25-29歳で16.3%)ことも、子宮頸がんの予防をさらに困難にしています。(図4)

4. 対策はあります

1. HPV ワクチン

10歳代の婦人は、ヒトパピローマウイルス HPV16型、18型の感染を予防できる HPV ワクチンの接種が推奨されます。これらのウイルスは子宮頸がんのおよそ70%を引き起こしていると考えられます。

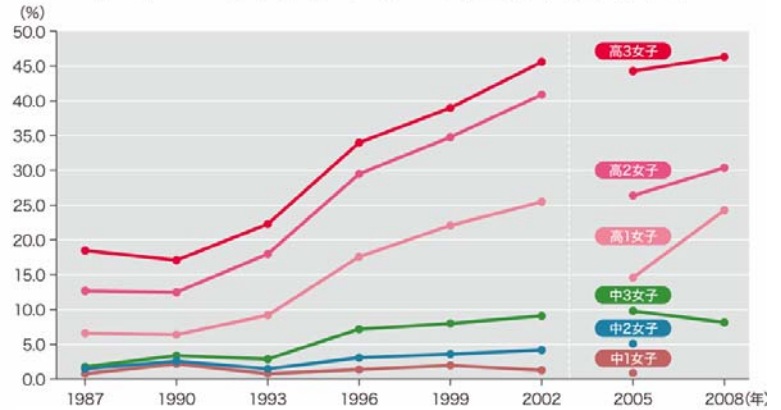
2. 子宮頸がん検診

20-30歳代の婦人は、子宮頸がん検診を受けることが推奨されます。検診により子宮頸がんの前がん病変や早期がんを発見でき、浸潤がんになる前に治療することが可能となります。また、HPV ワクチンを併用することも一つの方法です。

今後は、HPV ワクチンと子宮頸がん検診を組み合わせた予防策が必要です。HPV ワクチン接種や子宮頸がん検診をご希望の方は、当院の産婦人科外来へお問い合わせください。

図 3

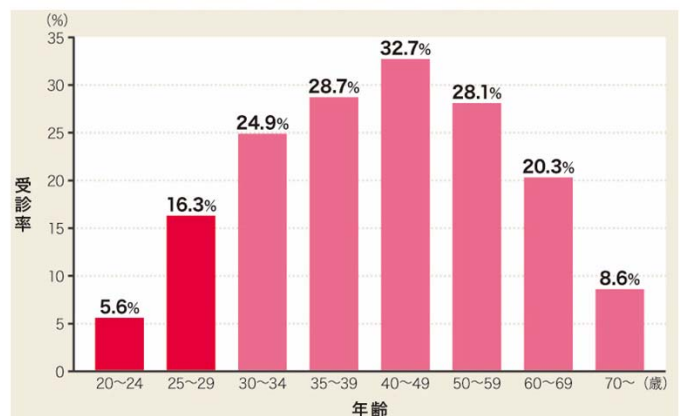
中学～高校女子の性交経験率



注) 87～02年までは高3の初交経験者累積率。05年からは、集計方法が変更になり、各学年における初交経験率を示す。
08年は、中1～2年は、調査実施せず。

図 4

年齢別の子宮頸がん検診受診率



次回 第4回 子宮頸がんの検診

産婦人科 三澤 俊哉 先生

2010年7月26日配付予定

この内容は、名古屋掖済会病院ホームページでもご覧頂けます。

えきさいかい



名古屋掖済会病院は、愛知県「がん診療連携拠点病院」の指定を受けました。